

1988-15

Zakāt においては、贈り物の受け手が返礼を履行しえないために負わねばならないであろう罪悪感や制裁も、またその場合に贈り物の与え手がいたくであろう支配欲や征服欲も、神への信仰を厚くすることによってともに回避することができる。そして、その結果、Ummah の絆は強められ、共同体はより安定したものになる。

総じて、著者による Zakāt 分析は、経済人類学に新風を吹き込むものと言えるだろう。著者は、ポランニーの統合の3パターン（互酬、再分配、交換）を機械的にイスラーム社会に当てはめるかわりに、贈与論の積極的解釈をとおして、より深いレベルでポランニーの方法を生かそうと試みているのである。本書のチャレンジングな試みは多くの読者を引き寄せずにはいないだろう。著者の研究のさらなる発展に大いに期待したい。

イスラーム共同体への多様な視角

—『国際大学中東研究所紀要』第3号
特集「中東の社会経済制度」—

橋爪 大三郎

中東・イスラーム世界への関心が高まっている折りしも、今回の特集「中東の社会経済制度」は、読み応えのある宿題をずしりと手渡してくれたような気がする。特集論文12本を含む17本の論文を通読すると、手つかずのまま解明を急がれていた問題の輪郭が、おのずと浮き彫りになるようだ。

この方面にあまり明るくない私は、ただ比較社会的な観点からイスラーム世界に浅からぬ興味をおぼえるのみだが、そんな外野席から、自分なりに思うところをのべてみたい。

やはり問題の焦点は、産業化・近代化に絞られてくる。ここ数世紀、凋落と停滞のイスラーム世界を尻目に、ヨーロッパ世界ばかりが目覚ましい近代化を遂げた（といちおう言うておく）。M. ウェーバーの分析によれば、資本主義はキリスト教世界から、プロテスタンティズムの倫理を経由して出現する必然があったという。政治的には国民国家、経済的には資本主義。これを両輪として編成されるのが、ヨーロッパ近代の社会経済制度である。

非ヨーロッパ世界は、これに比して遅れた社会とみなされた。ヨーロッパの制度がモデルで、それに追いつけとせきたてられる。イスラーム世界も例外でない。反植民地闘争、アラブ民族主義にさえ、ヨーロッパ的な原理の色濃い影が落ちている。イスラーム世界の近代化をどうすれば達成できるか。1970年代ごろまでは、そういう問題設定に現実性が感じられた。そして、中東諸国や特にエジプトで、どのような経済開発努力が重ねられ、挫折していったか、石田進論文、中島洋一論文がよくフォローしている。

イラン・イスラーム革命の成功(1979)このかた、事情が変わってきた。非ヨーロッパ世界の側で、近代ヨーロッパ世界と根本的に異なる体制の可能性が、はじめて具体的に追及されたのである。イスラーム世界がイスラームの倫理によって希求する社会とは、どのようなものか。それを掴まずには、イスラーム革命の現代的な意味あいをはかることもできない。

最近とみに関心を集めている無利子銀行論も、この脈絡から注目すべきものだ。今回の特集には、ポーフム大学の Nienhaus 博士と、前イラン中央銀行総裁の Nourbakhsh 氏が専門の立場から論文を寄せており、鈴木規夫論文とあわせ読むならば、問題の所在を理解するのに便利である。

イスラーム共同体の成員は、リバー（利子）の取得を禁じられている。資本主義的な商業銀行は是認できない。それゆえ、無利子銀行の存在がどうしても必要となるのだが、そのようにただ単に、個別に問題を追っていくだけでは十分でない、もっと総合的な「中東世界に固有なパターン、編成原理」に注目すべきである、と黒田壽郎論文はいう。そこで手掛りなる

のは、スピノザの政治論だ。なぜかという、スピノザが、社会契約説によらない（ホブス、ロックの系統に対立する）ところが、イスラーム社会の論理をよく体现しているからである。

この特集を通じて感じられるのは、ウンマ（イスラーム共同体）の理念と実態に対して丹念な視線が集められていることである。ウンマのあり方をめぐって、懐の深い研究が持続するのはよいことだ。

その場合、特集のいくつかの論文が強調しているように、タウヒード（一化）がキー概念になるだろう。黒田壽郎論文は、キリスト教的ヨーロッパ近代を特徴づける「三位一体、契約論的法、国家論のトリアード」に対して、「タウヒード、シャリーア、ウンマのトリアード」がイスラーム世界の「特異な文化、社会的編成配置を構成する」と示唆する。私はいま、その当否のほどをはかりかねるが、有望な作業仮説と言えよう。

もうひとつ感じたのは、新しい方法を意欲的に駆使する論文の多いことである。贈与論的アプローチによる佐藤秀樹論文、フーコー、ペイトソンを援用する霜垣和雄論文、等々。方法が成功を約束すると考えれば楽観しすぎだが、問題の性質上、ヨーロッパ社会科学の常套に囚われない着眼が、この分野にはぜひとも必要なはずだ。

ウンマの実態を多角的に論じる論文が並んでいるのが、収穫に思える。中世の市場秩序に関する湯川武論文、財の移転（インファーク）に関する岩井秀子論文、非ムスリム（ズィンミー）の地位から、逆にウンマの性格を照射する黒田美代子論文。中世スペインのキリスト教徒が、ユダヤ人やムスリムをどう扱うか対比した奥田敦論文。

ウンマは、一定の地域的まとまりとして機能するが、それ以上に、全ムスリムを包括する単一の共同性である。この点、政治的国家的分立や近代的な経済運営とは、本来相いれない性格のものだ。ウンマが、ミッラ（個別宗派の自治単位）の複合として組織される。信教の自由を保証する政治的国家的とは別の、宗教的寛容のあり方として、面白いモデルに思える。レ

パノン情勢は、なかなかわかりにくかったのだが、以上をふまえ、突っこんだ説明を加えている小杉泰論文が、私には説得的だった。

特集からは外れるが、1930年代日本の反ユダヤ主義を概観した丸山直起論文も、最近の内外の情勢と考えあわせ、興味深いものがあった。

紙幅の都合で言及できなかったその他の論文も含め、この紀要は相当の充実を示していて、嬉しく感じた。しかし、誰より、執筆者自身がこれで満足しているはずがない。論文のそこここにはじみ出している課題意識や意気ごみのほどから察するに、今回で3号を重ねたにすぎないこの紀要は、まだまだ当面の難敵を攻略するための、ほんの足掛かりを組み上げた程度にしか位置づいていないのではないか。ともあれ、こうした着実な前進が持続して、わが中東・イスラーム研究が世界的な水準を凌駕する日を、楽しみに待ちたい。

Patricia Crone and Martin Hinds,
*God's Caliph: Religious Authority
in the First Centuries of Islam*,
Cambridge, Cambridge University Press, 1986, 157pp.

松本 耿 郎

Khalifah（英語のCaliph）という語にはイスラーム史における政治的・宗教的葛藤の歴史が秘められている。この語は「神の代理人」Khalifah Alīhāhという称号を略したものであり、イスラーム教団の長を指すとされる。しかし、一般的には、預言者ムハンマドの没後は神から直接啓示を受けとる能力を有するものがなくなったのだから、「神の代理人」を字義通り「神」の「代理人」と見るべきでなく、むしろ、「神の使徒の代理人」Khalifah